

【ポスターセッション】

社会福祉施設で体験的な学習を積み重ねる教育プログラムの評価

○ 東北福祉大学 阿部 利江 (7795)

三浦 剛 (東北福祉大学・1684)

社会福祉施設体験、教育プログラム評価、福祉教育

1. 研究目的

本学では大学初年次より社会福祉現場で体験的な学習を積み重ねる教育プログラムを開講し、施設職員の協力の下、実践的且つ理論的に福祉を学べる教育環境や支援体制を整えてきた。これまでに受講してきた学生の様子から、職業理解や福祉専門職を志す意識を高めることにつながっているように感じられる。しかし、著しい社会の変化に応じながら、大学はより充実した教育環境や支援体制を構築していくことが必要不可欠であり、いま一度、この教育プログラムも見直す時期に差し掛かっている。

本研究は、この教育プログラムを評価し、再検討を進めていくことにある。

2. 研究の視点および方法

1) 研究の視点

この教育プログラムは、社会福祉施設で生活されている方々（利用者）やそこで働く職員と関わりながら学習を進めるため、「入所者の生活を支援すること」への意識を強くする傾向がある。福祉の専門的な知識や技術を習得していない時期から実践的な学習を進めることは、ときに社会福祉の理念や定義の捉え方を曖昧する恐れもあり、教員や施設職員に求められる教育的な役割は大きい。そのため、学生がこの教育プログラムを受講することへの期待とその学習成果を把握する必要があると考えた。受講する学生の期待と学習成果を整理することで、教育プログラム内容の検討につなげていく、これが今回の研究の視点である。

2) 研究の方法

2017年4月6日の受講希望者ガイダンスに出席した学生180名を対象にアンケート調査を行った（回収率83.3%）。その後、実際に受講した学生31名を対象にワークショップを開催し、学習への期待とその成果をそれぞれ挙げて整理した（2017年6月2日、2018年1月17日）。さらに学生が整理した期待と成果を、報告者らがカテゴリー化して分析を行った。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に則ることに加え、学生が記した調査票やワークショップの成果物がこれからの学生個人の生活や成績等に影響を及ぼさないことを直接説明した。

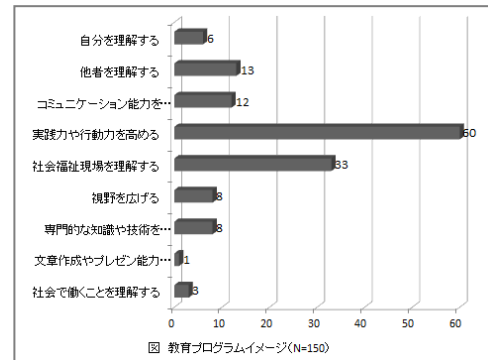
そして、調査結果は個人が特定されないよう統計的な処理や分析を行うことで同意を得た。

4. 研究結果

1) 教育プログラムに対する学生のイメージ

10項目より特に強くイメージするものを1つ選択した。その結果、「実践力や行動力を高める」イメージが特に強いことがわかった。

この教育プログラムでは、大学初年次の学習目標として「対人援助の基礎となる自己理解や他者理解、コミュニケーション方法等を体験的に学ぶ」と示めている。だが、学生は施設での体験そのものが「実践力や行動力」を高めることにつながると考えており、施設職員の下で体験を積み重ねることに期待していた。



2) 期待 ― 学生が学びたいこと―

「社会福祉施設(現場)の理解」や「対人援助に求められる知識や技術の習得」など、学習目標に沿った内容の他、「福祉施設で働く職員からの直接指導」、「自分自身の成長」も挙げられた(N=451)。学生は「施設の雰囲気を知りたい」や「認知症について学びたい」、「専門職として働く職員の姿を見たい」などと記していることから、大半の学生が社会福祉専門職を志してはいるものの、想像でしかない社会福祉現場を自身の眼で確かめ、体感したい様子がうかがえた。

3) 成果 ― 学生が学んだこと―

「利用者個人に応じた関わり方」や「職員への報告・連絡・相談の重要性」、「車いす操作やリネン交換などの介護技術」などが挙げられた(N=331)。学生は「自分本位でなく相手のことを第一に考え、一人の人として関わる事が大事だと感じた」や「色々な人(職員や他機関、家族など)との情報共有が重要だと知った」などと記しており、学習目標にある対人援助の基礎となる学びが得られていた。また、「人の最期に立ち会い、命の尊さを知った」という体験から、利用者の人生の一部に関わる意義を考える機会にもなっていた。

5. 考察

社会福祉施設での体験的な学習は、福祉専門職を志す自分自身の適性や覚悟を見極めたい思いと、自分自身を成長させたいとの思いから受講していることがわかる。しかし、定期的に体験を積み重ねていくことは容易でなく、時間の経過とともに学習意欲が損なわれることや取り組みがマンネリ化している恐れも察した。定期的な体験や出来事一つひとつが机上で学ぶ理論と結び付きやすくなるような支援体制を考え、また、学生がより自身の取り組みに自信を深め、将来につながるような教育プログラムへと発展させていきたい。